

名古屋地理学会 2010 年度研究報告会／総会

日 時：2010 年 6 月 5 日（土）9:25～17:00（途中休憩：12:05～12:55）

会 場：中部大学名古屋キャンパス 6 階 610 講義室（JR 中央本線、名古屋市営地下鉄「鶴舞」駅下車）

開会の辞 9:25

午前のセッション 座長：溝口晃之 9:30～12:05（途中 5 分の休憩）

1. 柿原 昇（愛知県立東海南高等学校）：ソウルと韓国南部海岸～韓国巡検抄録～
2. 岐阜県立加納高等学校地域研究部（代表者・島邊遼佑、指導・木村稔）：加納の土地空間の変化～まちのポジションを考える～
3. 羽土文彦（愛知県立津島東高等学校）：地理教育の充実に関する研究—地理教育を重視した地理歴史科他科目の学習指導および地理教育をめぐる現状の把握—

昼食休憩／評議員会（8C 講義室） 12:05～12:55

午後のセッション 座長：落合俊介 13:00～15:35（途中 5 分の休憩）

4. 安積紀雄（名古屋産業大学）：愛知県小牧市における営業倉庫の立地
5. 波多野峻（愛知県庁）：輸出航空貨物流動における中部国際空港の利用要因
6. 島田善規（名古屋大学大学院環境学研究所社会環境学専攻）：名古屋市営バス乗車人員の減少要因の検証と路線別要因の考察について

総 会 15:35～16:00

懇親会 16:00～17:00

発表要旨

午前のセッション

1. 柿原 昇（愛知県立東海南高等学校）：ソウルと韓国南部海岸～韓国巡検抄録～

韓半島の南半分を占める韓国は、漢江の奇跡と呼ばれる高度経済成長を遂げ、今日ではアジア NIEs の仲間入りを果たし、急激に発展している。主要工業製品も軽工業製品から自動車・鉄鋼など重化学工業製品の生産に比重が移行している。さらに、近年、コンピュータ産業において日本を凌駕する存在であり、その経済発展の状況は目を見張るものがある。とくに、ソウルと釜山などの都市の立体的な土地利用の進展は特筆できるが、反面その他の地域との経済格差の問題を抱えている。

日本は隣国である韓国と文化面においても、密接な繋がりを持っているが、過去において不幸な歴史を有してきた。戦後、国交の正常化が遅れたため、長らく近くて遠い国という存在であった。1965 年、日韓基本条約が成立し、両国の国交正常化がようやく実現したが、その後もしばらくの間文化交流が進展しない状況が続いた。しかし、1988 年のソウルオリンピックの頃より、日本において韓国ブームが生じ、日本と韓国の文化交流の規制が徐々に緩和されるようになった。これに伴い、韓国への日本人観光客が増加するようになる。1998 年には韓国で日本文化の開放策が打ち出され、相互交流が進展するようになった。2002 年のワールドカップサッカー大会の共同開催に前後して、韓流ブームが起こり、とくに日本から韓国へ多くの観光客が訪れるようになった。また、近年韓国からも多くの観光客が来日し、相互交流が一層深まってきている。しかしながら、私にとって、韓国はこれまで依然として近くて遠い国であったが、野外歴史地理学研究会が主催する現地集合・現地解散の方式で行った韓国巡検に参加する機会に恵まれ、今回初めて韓国への訪問を実現した。この巡検では、ソウルのホテルに集合した後、午後有志による徒歩でのソウルミニ巡検を行い、翌日、KTX に乗車して、全羅南道の観光の拠点光州、日本式家屋が残る羅州市榮山浦、南西岸に位置する港町・木浦を訪ねた。木浦で一泊し、翌日海割れで有名な珍島を訪ね、その後中南部の宝城郡の緑茶観光農園大韓茶園、順天市の南西に位置する樂安邑城民俗村を見学した。最終日は豊臣秀吉の朝鮮侵攻で築城した順天倭城、順天市西北に位置する高麗時代からの名刹の松廣寺を訪ね、高速道路を走行し、夕方最終目的地の韓国第 2 の都市・釜山に到着した。

釜山で 1 泊した翌朝、宿泊先で解散となり、4 泊 5 日の巡検は終了したが、単独でソウルに戻り、3 日間ソウルに滞在して、若干市内見学を行った。以下において、この巡検を通じて学んだことをスライドも利用して報告したい。

※発表時間は 1 件あたり 50 分（10～15 分程度の質疑応答を含む）

2. 岐阜県立加納高等学校地域研究部（代表・島邊遼佑、指導・木村稔）：加納の土地空間の変化～まちのポジションを考える～

生徒にとって通学路は一つの重要な生活空間である。かつては城下町でもあり宿場町でもあった「加納」。歴史ある町であるが、意識しなければただ通学する学校がある場所、町、地域という認識であろう。加納高校地域研究部では開発著しい加納町内の環境変化を、マンション建築、空き地や駐車場など土地利用の変化から調べ、その変化から想定できそうな短所、長所をあげてみた。そして実際にフィールド調査し写真を撮ったり、まちづくり会の催しに参加したりして地元の人の意見も聞いてみた。また篠島巡検、大阪巡検、北海道巡検で訪れた各地の都市や町と「加納」を比較し、「加納」はどんなポジションの地域なのか、今の加納は何をなすべきかを考えてみたい。

3. 羽土文彦（愛知県立津島東高等学校）：地理教育の充実に関する研究—地理教育を重視した地理歴史科他科目の学習指導および地理教育をめぐる現状の把握—

近年、高校生の地理的認識が不足しているという実感があり、同様の指摘をしばしば耳にする。その一方で、高等学校における地理教育の衰退は進み、現任校でも平成 21 年度の教育課程から地理科目が消滅した。そこで、地理歴史科の地理以外の科目における地理教育の可能性と有用性を検証するとともに、愛知県の県立高等学校における地理教育をめぐる現状と問題点を明らかにすることで、地理教育の衰退を少しでもくい止め、今後の地理教育の充実に資することを目指した。

午後のセッション

4. 安積紀雄（名古屋産業大学）：愛知県小牧市における営業倉庫の立地

愛知県小牧市は県下において営業倉庫の集積が大規模であり、従来、倉庫の立地は港湾、あるいは水路筋が主体であったが、内陸の小牧市が新たに倉庫の集中する地域を形成したことは地域現象として留意すべきである。ここで、当市における倉庫の設立、倉庫業者の属性、荷主の性格、倉庫立地の変化などを多面的に考察する。とくに倉庫の設立は小牧独特の農民共同貸倉庫の設置を明らかにし、荷主の性格では保管品目、ならびにその入出庫先の地域、さらに保管の形態を検討する。

5. 波多野峻（愛知県）：輸出航空貨物流動における中部国際空港の利用要因

本研究は、中部国際空港を事例とし、①同空港やその前身である名古屋空港を取り巻く輸出航空貨物流動がどのように変化してきたのか、②中部国際空港が利用される要因、されない要因にはどのようなものがあるのか、③これらの点から、航空貨物流動の社会的有効性をどのように評価できるか、という3点を明らかにすることを目的とした。

本研究の調査結果は、日本の航空貨物流動において、大空港（成田国際空港）への集約化が進展していることを示している。既存の航空貨物研究において、このことは概ね肯定的に捉えられていたが、中部国際空港を事例とした本研究では、緊急性の高い貨物を扱う中部圏の荷主企業などにおいていくつかの問題が生じていることを確認できた。

今後の航空貨物研究においては、従来見落とされがちだった航空貨物の多様性や空港が地域経済に与える影響といった点についてより注目していくことが望まれる。

6. 島田善規（名古屋大学大学院環境学研究科社会環境学専攻）：名古屋市営バス乗車人員の減少要因の検証と路線別要因の考察について

名古屋市においても乗合バスの乗車人員の減少が止まらない。このバス離れ現象の要因についてこれまでは、「地域の拡大、人口のドーナツ化」「モータリゼーションの進展」「地下鉄網の整備」「自転車利用の増加」「運賃上昇」「サービス低下」などが指摘されてきた。

しかし、これらの要因を定性的に列挙しただけでは、その要因の量的な影響度や、他の要因の存否を確認したことにはならない。特に運転免許人口や自動車台数の増加がおさまらず、また運賃値上げもなく、地下鉄建設もあまり進捗しない近年のバス離れは、従来とは様相が異なる可能性がある。

名古屋市営バスのデータを基に、前掲の要因の影響度を重回帰分析により検証した。

この結果、「連続的な強いバス離れの要因」が別に存在するのではないかとの推定が生まれた。平凡な結論になるがその重要な部分は、「マーケティング戦略の欠如」にあるのではないかと解釈できるが、路線別にその要因を探ることが求められている。

ただ、顕在化したニーズから出発するこのような手法によってどこまで捉えきれるか、今後の課題である。